

ブラッセル日本人学校における現地校交流の実践

前ブラッセル日本人学校教諭

北海道釧路市立鶴野小学校教諭 小野寺 隆

キーワード：在外教育施設、ベルギー、現地校交流、生活科、総合的な学習の時間

赴任校の概要（2021年4月現在）

学校名・日本語：ブラッセル日本人学校

学校名・現地表記：The Japanese school of Brussels

URL：<http://www.japanese-school-brussels.be/>

1. はじめ

2020年から広がってきた新型コロナウイルスは、日本国内のみならず、世界各地で大きな影響をもたらした。私が赴任していたベルギーのブラッセル日本人学校でも、派遣最終年度である2020年度には通常の教育活動を行うことは難しく、長年行われてきた現地校との交流も中止となってしまった。

日本人学校の教育活動の中心は、任期が2年から4年の派遣教員が担う。日本人学校で行われる行事や活動の中止は、その後の活動の継続に大きな支障をきたしてしまう。今回、「在外教育施設における指導実践記録」において、私がブラッセル日本人学校で行ってきた現地校交流の実践を記録として留めておくことで、今後、各国の日本人学校において現地校交流を行っていく先生方への参考になればよいと思う。

2. ブラッセル日本人学校の現地校交流

(1) ブラッセル日本人学校の特色

ブラッセル日本人学校の特色ある教育活動として、フランス語が学べること、そして、現地校との交流等の国際理解教育が行われていることが挙げられる。ベルギーには3つの公用語があるが、ブラッセル日本人学校ではフランス語を学ぶことができる。小学1～2年生は全員がフランス語を学び、小学3年生以上はフランス語か英語を選択して学ぶことができる。日本人学校に通う児童の中には幼稚園まで現地校で学んでいた子も多く、低学年児童の中には現地の人とフランス語で会話することができる子もいる。

現地校との交流は、長年続けられていたブラッセル日本人学校の特色ある教育活動の一つで、小学部、中学部ともフランス語共同体の学校との交流が行われてきた。また、小学6年生とルーヴァン大学の学生との交流も長年続けられてきた活動の一つである。

(2) ブラッセル日本人学校の現地校交流について

現地校交流について、小学部では2学期にレイモンド・ヴァン・ベル校を交流相手として「現地校に訪問する活動」、「日本人学校に招く活動」をそれぞれ1回ずつ行っている。中学部では春にヨーロッパ・スクールを訪問する交流、3学期にモルロンウェイ校との交流（隔年で訪問と来校）を行っている。

日本人学校の子どもたちにとって、同世代のベルギーの子どもたちと交流する貴重な場であり、学んでいる外国語（フランス語・英語）を活用する機会でもある。また、保護者からの期待が大きい教育活動の一つでもある。

(3) 現地校交流の課題について

派遣1年次、実際の交流の様子を見ると、主体的に取り組んでいる児童生徒はもちろん多いのだが、現地校交流はやりたくないというネガティブにとらえている子も少なくない。前年度の交流の経験から、「言うことを聞いてくれない」「学校のルールを守らない」等、現地校の子への不平不満の声が聞こえてくる。

また、教員にとっても見通しを持ちづらい活動になっていた。短期間で多くの教員が入れ替わる日本人学校の特性上、一度も活動の経験がない教員の割合が多く、交流の目的や前年度までの経過、活動の様子がよくわからないうちに交流計画を立てなければならない。現地校の教員は英語が通じない場合も多く、日本人学校の外国語部の教員がいなければ教員間のコミュニケーションさえままならないこともあった。

現地校交流は長年続けられている活動だが、ブラッセル日本人学校では、相手校のようにプログラムが整えられていたり、内容が精選されたりしていない。また、出入りが多い学校とは言え、毎年同じ子たちとの交流をしているので、回を重ねる毎に互いの交友が深まっていてもよいのだが、現状必ずしもそうっていない。本校の現地校交流には、3つの課題があると考えている。

1つ目は、成果の積み重ねができていないことである。毎年の交流内容や反省の蓄積が十分になされておらず、次年度に生かされていない。そのため、毎年、各学年でその都度、交流内容を検討・実施することとなり、結果、「前年度の交流が生かされない」、「学年が違うのに同じような活動をしている」等の反省が毎年のように出されることになっていた。

2つ目は、交流の目的が不明確なことである。本校で長年続いている活動であり、また、相手のあるものなので、現地校交流は年間の活動計画に位置づいている。ただ、「何のために交流を行うのか」という目的意識が児童生徒、そして教員側にも不足していたのではないか。活動をコーディネートする教員が、色々な行事等の準備で忙しく日々を過ごしているうちに交流の時期となり、限られた時間の中で慌ただしく計画を立て、児童生徒はそれに従って準備をする。結果、成果が上がらない交流になってしまったものと考えている。

3つ目は、日本とベルギーとの違いへの対応である。まず、言語が違う。子どもたちが育ってきた環境が違う。人種も違う。違うからこそ交流に意義があるが、そこには目に見えない壁がある。言葉の壁、そして、文化の壁である。日本の学校の常識が現地校の子どもたちには通じないということもしばしば見られる。子どもたちは、交流しているうちに壁を自然に越えていくこともあるが、壁にぶち当たることもある。それらの壁を乗り越えるためには、何かしらの手立てが必要となるが、それが不十分だったと考える。

(4) 課題解決のポイント

現地校交流の課題を焦点化していくと、3つの解決のポイントが見えてきた。

1つ目は、児童生徒の主体性である。前年度の交流の様子から考えると、児童生徒は交流の意義や目的を十分にもたずに活動していたように感じられる。そこで、児童生徒の主体性を引き出すところから計画していくことが、現地校交流の活性化につながるものと考えている。

2つ目は、年間計画や全体計画の必要性である。毎年の成果を次年度に生かし切れていないのは、年間計画・全体計画が作成されていないことが大きい。計画があることで、目標や系統性、発達段階を踏まえて交流を行うことができ、活動の成果や反省を次年度に生かすことができる。

3つ目は、違いを乗り越える工夫や努力である。現地校との交流では、相手が日本人ではないため、日本語が通じないし、日本の常識も通用しない。どうすれば相手と心通わせる交流ができるのか。言葉の壁を越えるために何をすればよいか。そのことに課題意識をもち、児童生徒も教員も試行錯誤し、工夫や努力を重ねることで相手との違いを乗り越え、心を通わせ合うことができるだろう。そして、そのような試行錯誤の中でこそ、児童生徒に異文化理解の土台や実感の伴った国際感覚が築かれていくのではないだろうか。

3. 現地校交流における実践

(1) 現地校交流における「交流目標」について

年間計画作成に際して、まずは学年の発達段階を考慮して「交流目標」をまとめることにした。ただ、その交流目標が、必ずしも発達段階に応じて発展していくとは限らない状況にあることがわかってきた。それは、言語の問題である。

本校では、小学部低学年は全員がフランス語を学んでいる。小学部の現地校交流ではフランス語文化圏の学校との交流を行うため、学んだフランス語を使って交流する良い機会となる。3年生以上になると英語かフランス語を選択して学習する。本校の傾向として3年生以上で転入してきた児童生徒は英語を選択することが多く、また、2～3年で転出する子が多い学校のため、フランス語を話せる児童は徐々に減少していく。そのため、学年が上がるにつれてフランス語でのコミュニケーションが難しくなる。低学年では「フランス語での会話」が目標なのに対して、学年が上がると「フランス語での会話」が成り立たなくなるため、フランス語でのコミュニケーションに関しては、学年が上がるにつれて目標のレベルが下がっていくようなことが起こってくる。

そのため、交流目標を「総合的な学習の時間または生活科における目標」と「コミュニケーションの目標」の2観点から設定することにした。そうすることで、前者では発達段階を考慮した目標を設定し、後者では言語の状況を踏まえた目標を設定できるようにした。

(2) 年間計画・全体計画

2019年度の交流をもとに、学年ごとに現地校交流の年間計画を作成した。また、各学年の年間計画をもとに、目標や活動等に絞って整理し、活動の系統性が見える「現地校交流全体計画」を作成した。なお、各学年の年間計画については、全体計画に書かれている目標や活動の他に、単元における活動計画をより具体的にまとめている。

【ブラッセル日本人学校 現地校交流全体計画】

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中学部
交流で目指す姿	挨拶や簡単な会話をしながら、異文化の友達と活動することを楽しむ。		日本の文化を紹介したり、外国の文化や習慣を質問したりして、違いを比べその共通性に気づくことができる。		日本と世界のつながりについて気づき、世界の人々との共通について考えることができる。		世界共通の課題に気づき、国際人としての立場や自分の生き方を考えることができる。
交流目標・生活・総合	現地校の子どもたちと楽しく交流するための遊びや関わり方を工夫し、進んで活動することができる。		現地校の子と楽しく交流しようとする目的意識をもち、日本の文化について伝えたり、ベルギーの文化や習慣に興味をもったりして、その共通点や相違点に気づくことができる。		活動を通して国際交流や理解を深めることができ、協力してグループ活動をすることで、国を超えた協力の大切さを実感することができる。		世界共通の課題に気づき、国際人としての立場や自分の生き方を考えることができる。
コミュニケーションの目標	挨拶や簡単な会話をフランス語で話したり、身振り手振りで気持ちを伝えたりしながら、異文化の友達と活動を楽しむ。		<p>【英語選択の児童】 簡単なフランス語の言葉や表現、身振り手振りで自分の思いを伝えようとする。言葉がわからなくても相手の伝えたいことを受け止めようという心構えをもつ。</p> <p>【フランス語選択の児童】 自分が学んでいる外国語を生かして、交流相手と積極的に会話しようとする。</p>				英語やフランス語等、自分が学んでいる外国語を生かして、交流相手と積極的に会話しようとする。
来校時の活動	○日本の遊び ○フランス語を用いた活動		○日本の文化を伝える自作の遊びやゲーム ○日本の学校体験		○身近な話題をもとに通訳を介した交流 ○スポーツ交流		○英語スピーチ ○双方向のコミュニケーション活動

(3) 授業研究

① 現地校交流における授業研究の観点

授業研究では、「主体的に学び合う児童生徒の育成」につながる手立てを明らかにすることを柱として研究を進めた。そこで、低学年・中学年・高学年・中学部の4つの分科会を組織するとともに、研究教科を低学年は「生活科」、中学年以上は「マロニエタイム（総合的な学習の時間）」とした。そして、児童生徒の主体性を引き出すために3つの観点から授業における手立てや工夫を考えた。

- a) 交流への目的意識をもたせる
- b) 単元計画における手立て
- c) 交流本番における手立て

② 授業の実際

小学部4年生では、現地校交流において、自分たちの作った遊びを通して、現地校の子どもたちと交流する活動を行った。授業研究では、実際に交流する直前の活動準備の時間を本時として授業を行った。以下、実際に授業を行った際の振り返りである。

- ・本時では、本番で相手意識・目的意識をもって交流できるように「交流のめあて（目指す姿と行動目標）を立てる」という活動を行った。結果、それぞれが自分の課題意識をもとに交流のめあてを立てることができ、本番でもめあてを意識して現地校の子と交流する姿を見ることができた。
- ・交流した日のうちに振り返りを行ったことで、「交流前に「めあて」を立てる活動」→「交流」→「交流後に「振り返り」をする活動」と、一貫して交流の目的を意識させることができた。
- ・自分たちで準備した活動（日本のことを遊びを通して伝える）で交流したことが、「自分で作った活動で楽しんでほしい」、「日本のことを知ってほしい」という児童の主体性を引き出すことにつながった。
- ・交流の際の遊びブースの設定、相手に渡すネームプレートの工夫（裏にフランス語で交流の予定が書かれている）や、遊びブースで日本語とフランス語で書かれた説明のボードを準備したこと等、他学年の交流でも生かせる方法があった。

③ 「主体的に学び合う」ための手立て

各分科会で研究授業を行ってきた成果として、以下のような手立てが明らかになった。

項目	具体的な手立て
a) 交流への目的意識をもたせる	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の始めに、「単元を貫くめあて」を立てる。 ・めあてと振り返りの場面を位置づける。 ・各場面における活動への必要感、必然性をもたせる。 ・交流の直前に、「交流のめあて（活動目標）」を考える。 ・1回目の交流における活動目標を設定する。（名前を覚える等） ・交流で行う活動を児童が考えるようにする。（主体性をもたせる） ・英語によるプレゼンを行う際のアドバイスシートを活用する。（どのようなプレゼンを行うのか見通しをもたせる）【中学部】
b) 単元計画における手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションをする最低限のフランス語を学ぶ時間を位置づける。 ・児童の主体性を引き出すため、自分たちで決めたり考えたりする場を設け、時間を十分にとる。 ・事前学習における交流本番のロールプレイング ・グループによる活動場面の設定
c) 交流本番における手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人学校と現地校の子同士でペアを組ませる。 ・活動やゲーム等を行う場の工夫。 ・日本人学校の子も現地校の子も予定がわかるようなネームプレート。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・実行委員を組織する…現地校交流における実行委員を組織し、活動の場を設ける。（歓迎の看板づくりや開閉会式の司会等） ・相手校との連携…事前に現地校へアンケートを送り、回答してもらう。 ・実態把握…アンケートを活用し、交流に抵抗のある児童を把握し、フォローする。 ・現地校の子とコミュニケーションをするために有用なフランス語の整理

4. おわりに

2018年度、そして2019年度の2回、担任として現地校交流に携わり、子どもたちの交流の様子を見てきた。

子どもたちの主体性や目的意識を高めていくことで、日本人学校の児童生徒と相手校の子が心を通わせ合うような姿を見ることができた。交流の最後には、姿が見えなくなるまでお互いに手をふり合う子どもたちの姿は、担任としてとても心に響くものがあった。

ブラッセル日本人学校の校歌3番に「ベルギーと日本をつなぐ『にじのかけはし』』という歌詞があるが、よりよい現地校交流を行うことができれば、日本人学校の子どもたちとベルギーの子どもたちの心のかけはしになる活動になると強く感じた。